

本日の学び:「どこにおられますか」 テキスト:マタイ2章1~8節

【理解の手がかりとして】

クリスマスの情景に登場する占星術の学者たち、彼らは一点を見つめて旅をし、そしてイエス・キリストへ辿り着く。その一点とは、彼らが長年研究し続けてきて、そしてようやく発見した「星」(2:2)であった。彼らはその「星」の研究者(科学者)であったが、しかしそれは単に知識(学識)の獲得のための研究ではなくて、待ち望む「王」の到来、その「時のしるし」を見いだすための研究であった。

それはいわば、彼らの人生の「目的」であったとも言える。それは何か、それは「ひれ伏して拝む」(2:11)ということ。つまり「礼拝する」ということ。私は常々「まことの神を神とするところ、まことの人間となる」と申し上げている。礼拝は、人間としての一生を「まこと」ならしめるものだと思っている。

占星術の学者たちにとってのベツレヘムへの旅、その目的は、決して自分のエゴを満足させる、ということにはない。彼らは自分を高めるために旅をしたのではなく、自分を低くすること、「拝みに来た」(2:2)のである。私たちの人生の迎えるべき旅路がここにある。

さて、本課のテキストは8節までである。9~11節に記される礼拝の様子に先立つ文脈である。2章節にこう記されている。「ヘロデ王の時代」と。彼ら学者たちは、ベツレヘムの幼子を拝む前に、そのヘロデ王を訪ねた。では、その「ヘロデ王」とはどんな王様だったのか。

ヘロデ王、彼を一言で表現するなら、「独裁者」という言葉が相応しい。彼はユダヤ人とエドム人との間に生まれた人。彼はローマ人の信用を得、紀元前40年には「ユダヤの王」の称号を受けた。彼の統治は紀元前4年まで続き、長期間権力を我が物とした王様であった。彼は「ヘロデ大王」と呼ばれ、色々な意味で大きな影響を与えた統治者であった。

彼が行った業績ではエルサレム神殿の大規模な増築がある。けれども彼の性格には致命的な欠点があった。それは狂気に近いほど猜疑心が強かったこと。それが年とともにひどくなり、晩年には「殺意にみちた老人」と呼ばれたそう。誰かが自分の権力の座を脅かすと思えば、すぐその人を葬り去ってしまった。彼は妻とその母を殺害し、長男とほかの二人の息子も殺害してしまった。ローマの皇帝アウグストゥスは「ヘロデの息子であるよりヘロデの豚である方が安心だ」と皮肉ったほどである。

彼は70才になって死が近付いたことを知ると、著名な人たちを背任罪の罪で一括逮捕し投獄して、自分が死んだ瞬間に全員殺してしまうように命じたという。そして彼はこう言い放ったそう。「自分の死を悲しむ者はいないから、せめて自分が死んだときに誰かに涙を流させてやるのだ」と。

このような人物が、将来王となる子どもが生まれたという知らせを受けたとき、どのように反応したかは想像に難くない。聖書の言葉の表現の奥に、彼の心の激しい怒りと嫉妬、そして殺意がある。東の国から来た学者たちが、なぜ、「ヘロデのところへ帰るな」(2:12)と夢で告げられたのか、なぜ、別の道を通して帰って行ったのか、それはその時代が「ヘロデの時代」であったからである。そしてその後、ヘロデはベツレヘムとその周辺一帯にいた2歳以下の男の子を、皆殺害するよう命じることになる(2:16)。

もし東の国の学者たちが、そのヘロデ王の宮殿を通って行かなければ、ベツレヘムの男の子たちは無事であったのに、と思うこともある。しかしイエス・キリストがお生まれになられた、そのことは事実で

あって、灯された灯火は必ず光り輝いて、暗闇を照らし出すのだから、この時、学者たちの来訪によって「闇の支配者」の心が揺さ振られたことは「神の時(カイロス)」であったと思う。

さて、以前、立花隆氏が書いた『宇宙からの帰還』という本を読んだ。この本は、アメリカ人宇宙飛行士へのインタビューの内容がまとめられたものである。この本の中の、<ほとんどの宇宙飛行士がその宇宙体験から何らかの「宗教的インパクト」を受けている>という内容に目がとまった。宇宙から見た地球が余りに美しく、はかなげであり、それを見ている飛行士には、地球の存在そのものが「奇跡」に思えたそう。また、それがとても偶然とは思われず、そこに神の意志を感じざるを得ない心境になる、神の存在なしに地球は存在し得ない、と実感するのだそう。宇宙飛行士という、知的にもこの地球上で最も優れた人たちの多くが到達する知識、それが「神の存在」である、ということ。これはこの占星術の学者たちの姿と重なるのではないだろうか。

人間というのは探究する生きものであると思う。そして人間には、常に高い次元の知識を得ようとする誘惑がある。その最も高次元のものを「神的なもの」と言うならば、その神的なものを自分のものにしようとする誘惑が人間にはある。その誘惑は、最初の人間アダムとエバが、蛇の誘惑に負けて食べてしまった「果実」のようなものと言える。蛇は言う。「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなる」(創世記 3:4)と。

しかし、この「神のようになりたい」という誘惑が、逆に私たちを神から遠ざける。そこでは私たちは自分のエゴにしがみついているだけである。私たちがそれぞれの人生において獲得していく知恵、経験というものが、願わくは自分のエゴを満足させるためのものではなくて、先に述べた宇宙飛行士のように、「神の存在」への気づきとなるものであることを願う。

『聖書教育』より

「なぜ異邦人である学者たちが、イスラエルの民や王に先立ってメシアを拝することができたのでしょうか。学者たちが幼子を拝するために旅する姿は、時代や国境を越えて世界各地でキリストを求め礼拝する人々の姿を暗示しているようです。」(聖書の学び～「どこにおられますか」)

「学者たちの旅を私たちの信仰の旅、学者たちの期待を私たちの神さまへの期待と重ねてみましょう。私たちはどこに向かって信仰の旅を続けているのでしょうか？」(大人クラス)